
ある執事の苦労話

月飼い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある執事の苦労話

【Nコード】

N7227H

【作者名】

月飼い

【あらすじ】

ある日、父親に就職先が決まったと告げられた常盤莉人は流されるままに竜崎家の執事となり・・・。

Episode 1：思い浮かぶは諺

青天の霹靂、寝耳に水、藪から棒。

親父の言葉を耳にした時、何故かこの3つの言葉が頭に思い浮かんだ。驚いたのは確かなのだが、それを通り越して冷静になっている俺がいたのかもしれない。

それは春休みにも入りもう少しで高校2年を迎えようとしていた春の出来事だった。

「莉人喜べ。こんな不景気で就職難の時期にお前の就職先が決まったぞ」

「は？どうしたんだ親父。頭でもおかしくなったのか？」

「いや、俺はいたって健康だから心配するな。ついでに言っておくがお前の耳がおかしくなったわけでもない。今、俺が言った事は紛れもない事実だからな」

そこまで言うなら、親父が言った事を冷静に分析してみよう。簡単に要約するならば俺の就職先が喜ばしい事に決まったらしい。さてここでまず問題になるのが俺の年齢である。俺は高校2年を間近に控えた16歳。就職活動なんて行っているわけがない。故に俺の就職先が決まるのはおかしい。そして、仮に決まったとして嬉しい事なのか？否、断じて嬉しくない。俺はまだ高校生活を楽しみたいし、これから来るであろう大学生活だって楽しみたい。故に就職先が決まった事が嬉しいはずがない。

結果としては、親父の頭がおかしいことになる。

「やっぱり、親父の頭がいかれたんじゃないのか？」

「同じ事を言わせるな。俺の言った事は紛れもない事実なんだ。も

つと素直に現実を受け止める。そして、喜べ」

「そんな事実簡単に受け止められるかよ。それに、仮に受け入れたとしても全くもって嬉しくない」

「天邪鬼な奴、俺は嫌いじゃないな」

「俺は親父の事嫌いだけだな」

「まあ、そんな冗談はどうでもいいとして、お前の就職の事について色々話しようと思う」

「とりあえず色々突っ込みたいけど聞いてやる」

「それでいい。時間を食うのはあまり好きじゃないからな」

「同感。とつとと話せ」

「分かってるさ。とりあえず給料は月給150万で住み込みという事になっている。ついでに振込先は俺の通帳になっているがそこら辺は気にするな。毎月、この中から3万円はお前のお小遣いとして振り込んでやる。3万もお小遣いをもらえるんだから素直に喜んでおけ。あとはお前の仕事の内容なんだが、簡単に言えば執事だ」

「お前は俺に何て言ってほしいんだ？」

「別に何を言わなくていいさ。言い忘れていたが就職先はかの有名な竜崎家だ」

「竜崎家ってあの有名な竜崎財閥の一家ってことか？」

「そうだ。お前はそこの1人娘の世話係だ。ボディガードも兼ねているから同じ高校に通ってもらう。つまり、お前は転校だ」

「・・・・・・・・」

「ついでに言っておくと、転校先は名門として名高い聖琳学園だ。良かったな」

「・・・・・・・・」

「どうした？あまりの嬉しさに言葉も出ないのか？」

「いや。余りの馬鹿馬鹿しさに言葉が出ないんだ」

「まだ信じてないともいうのか？」

「こんな話信じられる人間がこの世に居ると思っているのか？」

「そんな事はどうでもいいさ。現にお前はその信じられないような

立場にいるんだから。まあ、信じていなくてもその内分かる時が来るさ。そろそろ迎えの時間だしな」

「迎えの時間ってどういう意味だ？」

ピンポン。

俺の質問に親父が答える前に家のインターホンが鳴り響く。俺は座っていたソファから立ち上がり玄関へと向かう。そして、何の確認もせずにドアを開けるとそこには明らかに怪しいスーツ姿の男2人が立っていた。

「貴方が常盤 莉人ですね？」

スーツ姿の男の1人がそう言った。特に威嚇しているわけでもなく、ただ単に確認しているだけに聞こえる。

「・・・そうだけど」

「貴方を迎えに来ました」

「迎えて・・・。もしかして、俺を竜崎家に連れていくのか？」

「話は聞いているようですね。それでは、車にお乗りください」

「いや、俺まだ行くて決めてないんですけど・・・」

「しかし、既に契約は済んでいますので」

「・・・」

雰囲気的に何を言っても無駄だという事はまず間違いない。ということは、俺に残された選択肢はおそらく2つだ。大人しくついていくか、逃げるか。おそらく逃げてても簡単に捕まるだろうから、結局は1択みたいなものだが。

「・・・分かったよ」

「そう言ってもらえると助かります。それでは、車にお乗りください」

俺は男の案内でいかにも高級車という黒い車に乗り込んだ。乗り込む前に聞こえてきた親父の頑張れよという声はとりあえずしかとした。

これから、俺はどうなるのだろうか。

Episode 2：なんとおつきな竜崎邸

車に乗せられてから約1時間が経過した。あまりにも退屈なわけだが、生憎暇つぶしする方法も思いつかない。同乗しているスーツ姿の男2人は知人ですらないので、話をする事も出来ない。情けない話だが、早くもホームシックだ。

「あとどれぐらいですか？」

運転している人に聞くのはマナーやモラルといった事を守れていない人間になる気がするので助席に座っている男にそう聞いてみた。ちなみにこの質問は2度目だったりする。

「あと少しです」

それだけ言うと男はまた黙る。せめて何か言ってくれば会話になるのかもしれないのだが。そうは思っても期待などこれっぽっちもしてないし、正直なところ会話が始まって気まずいだけの様な気がする。

それにしてもだ。つい30分前にも同じ質問をしたわけだが、先程の答えもあと少しでした。俺との時間に対する感覚があまりにもずれていて困ってしまう。俺のあと少しは5分以内、どんなに長くとっても10分までである。それなのに、この男ときたら30分以上もの時間をもう少しと言っている。この男にすればもしかしたら半日ももう少しなのかもしれない。そう考えると俺があと何分、車に乗っているだろうか？は考えない方がいい命題なのかもしれない。一番、ベストなのは眠って起きた時には到着しているパターンで間違いないのだが、如何せん眠くない。打つ手なしといったところか。

ボーっとしていても何の解決にもならないので色々考え事をしてみることにする。馬鹿親父の話によると俺は竜崎家で住み込みの執事をやることになっている。とりあえず、まず初めにどうして俺がと不思議に思ってしまう。俺の記憶では竜崎家との縁はまったくないはずだ。あんな馬鹿親父にこんな大それた知り合いが居ると思えない。しかし、実際問題として何かしら繋がりがあるから俺は竜崎家で働くのである。何の関係もない部外者という落ちは在り得ないだろうし。

母さん繋がりだろうか。可能性があるといえばそれぐらいしか思いつかない。しかし、基本的に家でだらだらして過ごす駄目な専業主婦の鏡の様な母さんには親父同様、竜崎家の様な大それた知り合いは居ないように思える。

考えても答えは出ないので次の問題に移るとしよう。俺がお世話をする人はどんな人間なのだろうか。これは、情報がまったくないため考える余地すらない気がする。

「はぁ・・・」

結局、何を考えても答えが出そうなのはなさそうである。考えすぎて頭痛が起こる前に止めておくのが得策だろう。もうボーっとしておこつ。つくまですつと。

「つきましたよ」

気付いたら寝ていたようだ。前からかかる声で起こされた俺は伸びをする。それから、窓から外に目を向けると目を疑うような屋敷が建っていた。

「何だ、これは・・・」

「早くお降りください。ご主人様が待っていますので」

「あ、はい」

スーツ姿の男に言われるがままに俺は車から降りもう1度、目の前にそびえ立った屋敷を見た。その大きさは俺の乏しいボキャブラリーでは伝える事ができないので割愛させて頂くがとりあえずでかい。普通の民家の何十倍だろうな。値段は・・・考えたくもない。凡人との違いをこれほどまでに見せつけてくれている感じだ。

「こちらです。ついてきてください」

そう言つて門をくぐつていく男に続き俺も門をくぐる。何ていうか一般庶民にすぎない俺がここを通つていいのか疑問を感じてしまう。急に撃ち殺されても不思議じゃないような気がするし。

尋常じゃない広さの玄関を通過しリビングにある豪華な螺旋階段を昇り2階に上がる。そこから50m競争ぐらいなら余裕で出来そうな長い廊下を歩き一番奥にある部屋に入った。

まあ、予想は出来ていたがそこはご主人様とやらの部屋だったらしく広く豪華であり、部屋の中にはご主人様と思える人と俺と同じ年ぐらいの女の子が居た。

「常盤 莉人を連れてまいりました」

「御苦労。お前たちはもう下がってなさい」

「はい、かしこまりました」

男2人はそう言つと部屋を出て行った。自然と部屋に残るのは俺とご主人様と女の子だけである。

「君が常盤 莉人君かね」

「はあ、そうですね」

「話は聞いているだろうから分かんと思うが、今日から君はここで働く事になる」

「らしいですね」

「まあ、そんなに固くならなくてもよろしい。紹介が遅れたが私は竜崎 治男。こっちが私の娘の唯だ。唯、莉人君に挨拶しなさい」

「竜崎 唯です。よろしく願います」

「こちらこそ、よろしく願います」

「仕事の方は屋敷内にメイドや執事がたくさん居るだろうから、適当に声をかけて教えてもらおうといい」

「はい、分かりました」

「それじゃ唯、莉人君を彼の部屋に案内してあげなさい」

「分かりました、お父様」

「莉人君、頑張ってくれたまえ」

「はい。それじゃ、失礼します」

ご主人様に挨拶をして俺は唯さんの後に続き部屋を出る。2人で歩いている間、会話がなかったため気まずい沈黙が流れたがどうしようもない。俺は割と人見知りする人間なんだ。

「ここが、貴方の部屋よ。私の部屋の隣になっているわ」

「へえ、そうなんですか」

「仕事の事はお父様が言っていた通りに他の執事たちに聞けばいいわ」

「分かりました」

「他に何か質問はあるかしら」

「一つだけいいですか？」

「何かしら？」

「どうして私が働く事になったんでしょうか？私と竜崎家には何の繋がりもないと思うのですが」

「・・・心当たりはないのかしら？」

「ええ、まったくないです」

「じゃあ、私の事も知らないようね」

「噂程度でしか知らないです。今日、会ったのが初めてですし」

「・・・そう。いづれ分かると思うわ」

「そうですか、分かりました」

「もう質問はないみたいね。それじゃ、部屋に戻っていいわよ、奴隷」

「はい、かしこまりました・・・えっ？」

「どうしたのかしら？」

「今、私の事奴隷と言いませんでした？」

「言ったわよ。貴方は私の奴隷なのだから仕方ないでしょ」

「・・・」

「とにかく部屋に行きなさい。私は部屋で休みたいから」

「はあ・・・、それでは失礼します」

唯さんにそう言って俺は自分の部屋に入った。先程見た部屋と比べると明らかに狭いがそれでは普通の部屋よりは大分広かった。普通なら喜ぶべきところなのだが今の俺にはそんな余裕はなかった。

「俺は、奴隷・・・なのか？」

限りなく嫌な予感がした・・・。

Episode 3：しつじらいふはきびしいや

なんだかんだで、不本意ながら竜崎家の執事のなつてしまった俺は現在、執事らしく屋敷を掃除中である。まあ、言わなくても分かると思うが大変だ。なにせ広いからな。一人でやったとすると間違いなく一日では終わらないだろう。

「なんで俺がこんな事をしないといけないかな・・・」

不満がついつい口から零れてしまう。誰も近くにいないからいいものの誰かに聞かれたら大変である。特に唯さんにだけは聞かれてはいけない。俺を奴隷と呼ぶ人なのだから何を言い出すか分からない。

しかし、1つ分らない事がある。どうして、唯さんは俺の前だけではあんなに冷たいのだろう。他の人に対してはたとえ2人きりでも奴隷などと言ったりはしないのに、俺と2人の時だけ嘘みたいに態度が変わる。一種の愛情表現か？なんて考えてみたりするけど、仮にそうだとしたらどれだけ病んでいるのだってという話になってしまう。

せっかく容姿が素晴らしいのだから性格も良ければ完璧人間だっただろうに。綺麗で長い黒髪、ぱつちりとした目に長いまつげ、笑顔が似合いスタイルも完璧。きっと学校ではもてるのだろう。あの性格も見せないわけだし。裏の性格を知ってしまった俺としてはまったく惚れる気がしないわけだが。

「どうしたのですか？手がまったく動いていませんよ」

「あ、すいません。ちょっと考え事をしてました」

俺に話しかけてきたのはメイドの1人である稲垣 恵理子さんだ。

歳は俺より3つ上らしく2年ほど前からここで働いている人だ。ここに来てまだ3日目の俺ですら分かるほどに唯さんと仲が良い。主従の関係でなく親友に見えるぐらいだからな。

「掃除は大変でしょうけど頑張ってくださいね」

「はい、ありがとうございます」

「それから、お嬢様から伝言を預かっていますのでお伝えします。掃除が終わり次第、部屋に来てほしいとのことです」

「分かりました。わざわざありがとうございます」

「いいえ、それでは失礼します」

そう言うとき恵理子さんは来た道を引き返していった。

「はぁ・・・」

恵理子さんが見えなくなってから俺は大きな溜め息をつく。理由はもちろん1つだ。唯さんに呼ばれた事である。また何を言われるか分からないので覚悟だけは決めておかねばならない。忘れたなんていったら次の日、命があるかなんて分かったものじゃないので逃亡も不可能である。

とりあえず掃除を終わらせよう。そう思う俺である。

時が少しだけ進んで俺の掃除も終わり唯さんの部屋での事。

「ねえ、奴隷。明々後日って何の日分かる？」

「明々後日ですか？すいません、分かりません」
「はぁ……。ねえ、貴方って学生よね」

そんな露骨な溜め息をつかなくても。

「まあ、一応学生ですけど……。ああ、始業式ですね」

「そう。明々後日からは私たちは高校に通わなければならないの」

「はい、そうですね」

「それで、いくつか貴方に言っておきたい事があるの」

「はぁ、何でしょうか？」

「とりあえず学校では私と他人のふりね。間違っても唯さんだなんて呼んだりしないで」

「じゃあ、何て呼べば」

「竜崎さんでいいわ。と言っても、話す機会なんてないと思うけど」
「分かりました」

「他は登下校の時だけど私は車で行くけど貴方は徒歩、または自転車よ。学校はここから歩いて30分ほどの場所だからそんなに大変ではないと思うわ」

「しかし、私はボディーガードの命も受けているので一緒にいないと駄目だと思うのですが」

「それは気にしないでいいわ。ボディーガードなんて名前だけだから。貴方に私を守るなんて思えないもの」

悔しいがそれは同感だ。武道を習っているわけでもない俺がボディーガードなんてそもそもおかしい話だと思っていたし。

「あと、私と話す事があったとして間違っても私なんて使わないで。不自然すぎるから」

「はい、分かりました」

「とりあえず、これぐらい気をつけてれば大丈夫かしらね」

「それでは、私は失礼します」

「あ、奴隷。戻る前にお茶を注いでくれる」

「・・・はい」

この後、俺がお茶を10回以上淹れなおしたのは秘密の話だ。お茶を淹れた事なんて今までなかったとだけ言い訳させてもうおつと思う。

Episodes…しじらいふはきびしいや（後書き）

作者の月飼いです。

第3話更新です。

読んでくれている方々、ありがとうございます。

これからもがんばりますのでよろしくお願いします。

Episode 4：拳動不審と親切

まあ、なんというか凄い学校だ。やっぱり私立の高校となると俺たち一般ピーポーが通う公立高校とは全然違うものようだ。とりあえず、俺には場違いだな。

正門と思われる門をくぐり敷地内に一步踏み入れる。まだ、実感湧かないがその内、湧くだろう。それより心配すべきは友達が出来るかどうかだ。仕事中は精神的にかなり疲れるので、悩みを話せる親友が1人は欲しいところだ。

そういや、俺の通っていた高校の友人たちはどうしているのだろう。突然の転校に驚いてはいるだろうが、悲しんでくれているのは多くても数人だろう。人見知りで人付き合いが下手だからしょうがない。決して嫌われているわけではない。・・・そう思いたい。

「とりあえず、まずは職員室に行けって言ってた気がするな」

玄関を通りすぐに右に折れて突き当たりの場所に職員室はあった。適当に数回ドアをノックしてから開けて中に入る。何人かの先生がこちらを見たので少し怯んでしまった。何人か睨んでやがるからしょうがない。俺が何をしたというのだろうか。

「君は、常盤 莉人君？」

ただ立っていた俺に20代後半ぐらいと思える女性教師が声をかけてくれた。俺が首を縦に振るとその教師は笑顔になった。

「やっぱり。私は君の担任になる堂本 愛子。よろしくね」

「よろしくお願ひします」

「とりあえず今から始業式だから、それが終わったらもう1度職員室に来てくれる？」

「はい、分かりました」

「体育館の場所は分かるわよね」

「さつき来る時にそれっぽいのが見えましたから大丈夫です」

「君は2年3組だからその列に並んでね。じゃあ、また後でね」

愛子先生はそう言うと言分の席に戻っていった。どうやらミーティングの途中だったようだ。俺が睨まれた理由も分かったところで俺は職員室を後にした。

体育館につくとどうやらほとんどの生徒が集まっているらしく人がいっぱいだった。おそらく、この学校には俗に言うヤンキーなどと言った人間たちはいないのだろう。皆がそれなりに真面目に楽しく過ごしているに違いない。あくまでも予想だが。

「2年3組と言われてもよく分からないな……。気をきかしてプラカードとか用意しときゃいいのに」

そんな独り言を呟きながらウロウロする。俺としては2年3組を探しているつもりだが周りの人から見たら挙動不審かもしれない。そもそも俺は1学年に何クラスあるかすら分からない。それさえ分かっていたら大方自分の並ぶべき場所は想像できるわけだが。せめて学年によって制服に微妙な違いをつければいいんだけど。ネクタイの色を変えるとかさ。

「貴方、どうかしたの？」

困ってる俺を見かねたのか後ろから誰かが声をかけてくれた。俺を安堵してからその人の方を振り向くと知っている顔がそこにあった。

「唯さ・・・じゃない。えっと、2年3組の場所が分からないんですけど」

「2年3組なら私と同じクラスね。私についてきたら分かるわ」
「ありがとうございます」

唯さんの親切さに助けられ俺は無事並ぶ事ができた。自分のクラスに並ぶだけでこんなとは前途多難だと思っしかない。そこはなんとなくだけど唯さんがフォローしてくれるような気がするので他力本願だが何とかなるかもしれない。

それにしても、早く始業式が終わってほしいところだ・・・。

Episode 5：俺はラッキー？アンラッキー？

さて、現在の状況をどう説明しようか。

簡単に言えば自己紹介だ。難しく言ってもおそらく自己紹介だ。

つまり、俺は今自己紹介の真最中というわけで・・・。

何度も述べていると思うが俺は人見知りなので、今この瞬間がとてつもなく辛い。俺一人を約40人の80もの目が一斉に見ているのだ。

「今日からお世話になります常盤 莉人です。よろしく願いします」

とりあえず、定番とも言える挨拶は終わった。しかし、この後何て続ければいいんだ？そもそも転校なんて今回が初めてだからこれ以上何て言っているかわからない。というよりも、これに続く挨拶なんてあるのか？

少し検討してみるとする・・・。

趣味を述べてみる。別に俺の趣味なんて知りたいと思っている人はいないと思う。故に却下。同じ理由で特技も却下。というよりも、初めての挨拶の場で自分について語るのはどうかと思うし。だって、これからの抱負とかだったらどうだろう？まあ、正直なところ皆頑張り程度にしか思わないだろう。

うん、駄目だ。俺の駄目な脳ではこれ以上考えられない。

「もういいのかな？それじゃ皆さん、莉人君と仲良くしてあげてください。莉人君の席は、唯さんの隣が空いているわね。唯さん莉人君に色々教えてあげてね」

「分かりました」

よりによって俺の席は唯さんの隣になってしまった。何の因果かそれとも神様のお茶目な悪戯か？どちらにしても喜ばしいとは言えない状況だ。間違っても主従の関係をばらしたら屋敷で何されるか分かんないし……。

「よろしくね、常盤君」

「こちらこそ、えっと……」

「竜崎 唯よ」

「よろしく竜崎さん」

俺がそう言つと唯さんはにつこりほほ笑んだ。いつもの俺に対する態度とは完璧に真逆だ。人間こうも変われるとはびっくりだ。そして偉大な気もする。

時が少し流れて昼休み。朝の自己紹介の後にこの席に座ってから俺は一度も動いていない。知り合いは唯さんしかいないし何をしていかも分からない。誰か1人ぐらい転校生に興味を抱いて話しかけてくれると思ったが今のところそんな気配はない。俺が嫌われているのではないかと疑いたくなるほどだ。

「よお、常盤君でいいのかな？」

「あ、別に君付けしなくてもいいけど」

まるで図ったかのように俺に話しかけてくれたのは今風な悪く言えば少しチャライ男だった。髪の毛は長く茶色に染まっていて世間的にイケ面の部類に入ると思われる。

「じゃあ常盤で。俺は海堂 亮太、よろしく。まあ、亮太とでも呼んでくれ」

「じゃあ、亮太って呼ばせてもらっよう」

「おう。じゃあ、こつちも下の名前で呼んでいいか？」

「構わないけど」

「オッケー。それにしても、莉人お前はラッキーな奴だ」

いきなり話が変わりすぎているし、もうちょっと具体的に話してくれないと何なのかまったく見当がつかない。そもそも、今日一日を通してラッキーなことなどなかった気がする。あるとすればアンラッキーのみ……。

「えっと、何が？」

「だっていきなり竜崎さんの隣の席じゃないか。席替えの時は飢えてる男やファンクラブの人間が隣を狙って大変なんだ。まあ、くじで決めてるわけだから特に何かが起きるわけでもないけど」

「へえ、ファンクラブまであるんだ」

「まあな。美女が多いと名高いこの高校で一年の時にミスコンで優勝してるからな。それも準ミスに大差をつけたらしいし。準ミスの人もその前の歳は優勝したんだけど竜崎さんには到底及ばなかったみたいだ」

正直、どうでもいい話だけど聞いておくべきだと思う。ここで興味ないなんて言ったら友達を作る前に失う事になってしまう。人間、何事も興味を持っていくようにしなければ。

「その隣の席に座れたんだ。お前はラッキーなんだぜ」

「へえ、そうなんだ」

「なんかどうでもいいみたいだな。嬉しくないのか？」

「っていうより彼女のこと何も知らないから何て言っていいいか分からない」

「まあ、それもそうだな。でもその内、分かると思うぜ。竜崎さんは性格も良いからな。男女両方に好かれるし、いわゆる完璧人間って言ったところか」

やっぱり予想通り、学校ではいい人で通っているみたいだ。俺と2人きりの時の唯さんを見せたら皆はどう思うのだろう。多分、信じてない気がする。どこかでそっくりさんを見つけてきたんだという話で終わってしまいそうだ。

「敵は強大か・・・」

「何か言ったか？」

「いや、なんでもないよ」

「そっか。それよりよ、今週末って暇か？せっかくだし遊びに行こうぜ」

亮太の誘いは嬉しかったけど返事は保留にしておいた。

執事に休みはあるのだろうか？

Episodes:俺はラッキー?アンラッキー?(後書き)

作者の月飼いです。

やっと5話目を投稿できました。

本当は毎日、更新したいんですが遅れてすいません。

読者の皆様、これからお付き合いいただけると嬉しいです。

それでは。

Episode 6：予想はグッドアンサー

「基本的にメイドも執事も休みはありませんよ」

だろうと思った。正直、これっぽっちも期待してなかったよ。いや、ほんの少しぐらいは期待していたかもしれないけどさ・・・。

高校2年最初の学校を終え、帰宅した俺はすぐに恵理子さんに休みなどについて尋ねていた。答えは予想通りというか最悪の結果というか・・・。

「もちろん休みを取ることは可能ですよ」

「えっ。というと」

「旦那様に頼めばいいのです。正当な理由があれば休みを頂けます。ただ莉人君の場合はお嬢様のボディガードの命もお受けしているので、旦那様ではなくお嬢様に許可を取る事になります。お嬢様が莉人君の休みを認めれば休みを貰える事になりますね」

「そうですか。ありがとうございます」

「いいえ。それより、どうしたのですか？いきなり、そんな事を尋ねて」

「ちよつと気になっただけです」

「そうですか。それじゃ、私は仕事に戻りますね」

「はい、ありがとうございます」

俺は仕事に戻っていった恵理子さんを見送ってとりあえず溜め息をついた。

理由など言う必要もないだろう。絶望したんだ、恵理子さんの答えに。深く、とても深く。

よりによって唯さんの許可を取らないといけないなんて。これは、

もう年中無休が決定したようなものだ。俺の辞書に休日という言葉が消えても問題ない状況だ。

「遊びに行きたい程度の理由じゃ絶対貰えるわけないし・・・」

とりあえず最悪の結果をシミュレーションしてみよう。

俺は休みを貰えない。つまり遊べない。ということは、例えば誰に誘われても断るしかない。最初は皆、じゃあ次回などか言ってくれる。しかしだ、回数を重ねるごとにそんな事は言われなくなり皆の中で俺は付き合いが悪い人間になる。そして徐々にその気持ちは嫌悪感に変わる。次第に俺はいつも一人。そして、人見知りがさらにグレードアップ。いつしか人を信じられない人間に……。そして、いつか孤独死……。

「やばい……。このままじゃやばい……」

「何がやばいのかしら？」

突然、後ろから声がかかりびっくりしてしまふ。どうやら唯さんが気付かぬ内に後ろにいたようだ。

「なんだか凄く悩んでいたみたいだったけど」

「いえ、問題ないです。心配掛けてすいません」

「別に心配はしてないわ。気になっただけよ」

「そうですか。まあ、どちらにせよ何にもないので」

「話さない」

「はい？」

「聞こえなかったのかしら。今、悩んでた事を全て話さない。これは命令よ、奴隷」

「いや、でも大した話ではないので」

「ならいいじゃない。大した話じゃないなら簡単に話せるでしょ」

「でも、世の中にはプライバシーという言葉があつてですね。私は個人について話したくない事は話す必要がないかと・・・」

「貴方にプライバシーなんてないの。貴方は私の奴隷なのよ。命令された事には従いなさい」

この女、言わせておけば・・・。

こっちはお前の奴隷になった覚えなんてねえんだよ。

そもそも執事にしたって不本意なんだ。お前ら金持ちの道楽かなんだか知らないが下らない事に俺を巻き込むんじゃないやねえ。

何が奴隷だ。人を見下してそんなに楽しいのかよ。この最低女め。

という、言葉は胸の奥にしまっておいて・・・。

「分かりました。しかし、本当に大したことじゃないですから」

「別にいいわ。早く話しなさい」

観念した俺は唯さんに話す事にした。もちろん、俺のネガティブシユミレーションは話さなかったが。

「まあ、正解とだけ言っておくわ」

「何が正解なんでしょうか？」

「私が貴方に休みを与えない事よ。もちろん、本当に大切な用事の時なら休みはあげるわ。でも遊びに行ったりするための休みはあげないわ。それは正当な理由にならないから」

「しかし、遊ぶ事は学生の仕事の一つかと」

「貴方にはその前に執事という仕事があるわ。まずは、それは全うしてからにすることね。貴方が完璧な執事にでもなれたら考えてあげるわよ」

また難しいお題を・・・。

「完璧な執事ですか・・・」

「そう。私が認める程の完璧な執事よ。最低でも10年はかかるでしょうけど」

「学生終わってるじゃないですか」

「そんな事、私に関係ないわ」

「はあ、そうですか。分かりました。とりあえず、私は仕事に戻りますね」

「そう、頑張つてね」

「はい。あ、ただその前に1つ聞いていいですか？」

「何かしら？」

「どうして唯さんは私に冷たいのですか？私は唯さんを怒らせる何かをしたのでしょうか？」

「・・・したわよ」

「・・・それを教えてもらう事は？」

「出来ないわ。貴方自身で考えてみるのね」

「分かりました」

俺はそう言ってから唯さんの元をさった。

歩きながら完璧な執事への近道を探してみたけど見つからなかった・・・。

Episode 6：予想はグッドアンサー（後書き）

作者の月飼いです。

大分、間隔があきましたが・・・。

6話更新しました。

これからも、よろしくお願いします。

Episode 7：誰かの独り言1

私にとって大切な記憶。

それは今から10年以上も前の記憶。

それは私がまだ6歳で幼稚園に通っていたころの記憶。

その頃の事はほとんど忘れてしまったけど、その記憶だけは私の中に強く印象付けられて消えることなく心に刻まれている。

それは手を繋いだ記憶。

暖かく心強く誰よりも優しくかった手。

大きさはあの頃の私の手と大差ないものだったけど私を安心されるほどの温もりを持っていた。

「ありがとう」

助けて貰った私が言った言葉。

相手は笑顔でどういたしましてと言った。

その笑顔もまた私の心の中に刻まれている。

「また会える？」

私は勇気を振り絞ってそう聞いてみた。

相手は笑顔のままで頷いてくれた。

そして約束をしてくれた。

小さな小指と小指を絡めて約束をした。

近い内に遊びにくると。

そして一週間後、約束を守って遊びに来てくれた。

それから毎週1度は遊ぶようになった。

いつも相手から私の家へ訪ねて来てくれた。

そして、夕方まで2人でずっと遊んだ。

私はずっとこの幸せな時間が続くと思ってた。
しかし、現実はその甘くはなく私たちに別れの時が訪れた。

「いつか、また会えるよね？」

私の言葉に相手はゆっくりと頷いた。

顔を見ると相手もまた私と同じように泣いていた。

「じゃあ、約束しよう」

そう言っただけ私は小さな小指を相手に差し出した。
前と同じように私たちはお互いの小指を絡めた。

ただ、約束は前回と少しだけ違っていた。

「いつかまた会った時、私をお嫁さんにしてね」

私の勇気を振り絞った言葉に相手は大きく頷いてくれた。

それから時は流れて・・・。

私たちはやっと再会した。

だけど、まだ約束は果たされていない。

私の初恋は形を変えて未だに続いている。

相手はいつになったら気付いてくれるのだろうか？

Episode 7 : 誰かの独り言1 (後書き)

作者の月飼いです。

今日は2話投稿になりました。

遅れを少しでも取り戻せたらいいんですが。

ただ今回の話は短いです。

重要な部分ではありませんが。

これからよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7227h/>

ある執事の苦勞話

2010年10月17日09時11分発行